

論文

帰還兵士の苦難

——ヘミングウェイの「兵士の家」を読む——

野間 正二

〔抄録〕

“Soldier’s Home” は、これまで日本では「兵士の故郷」と訳されてきた。良く考えられた和訳ではあるが、作家の意図をじゅうぶんに考慮した訳とは言い難い。このタイトルには、英語の同音の Soldiers’ Home の意味も込められていると思われる。Soldiers’ Home は、全米各地に設立されていた、何らかの事情で戦線から故郷にちよくせつ帰れない兵士を収容する施設である。とすれば、タイトルの “Soldier’s Home” も、Soldiers’ Home の意味をも含む「兵士の家」とする方が適当だと考える。そのことの妥当性を証明するために、本論文は書かれている。主人公のクレブスは1919年に師団とともに米国に帰還している。だから1919年に帰郷したと誤解されがちだが、実は、1918年の休戦から「数年後」に故郷に帰っている。その数年間については何も書かれていない。そもそもヘミングウェイは「氷山の理論」を提唱した作家である。全てを語るわけがない。クレブスは、戦争で心が傷ついていて、おそらく Soldiers’ Home のような施設で「数年間」を治療のために過ごしていて、故郷に帰れるほどに回復したと考えたから帰郷したと解釈する。

キーワード 帰還兵士の苦難、兵士の家、戦争神経症、第一世界大戦、兵士の帰郷

本文

ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の「兵士の家 (“Soldier’s Home”)」は1924年に書かれ、1925年6月の同時代作家のアンソロジーに、そしてその4カ月後に短編集『われらの時代に (*In Our Time*)』に収録された。この作品は、作者自身によって、1924年12月の段階ではあるが「これまで書いたなかで最高の短編」(SL 139) と見なされている。

I

おもに描かれているのは、オクラホマ州の田舎町の実家に約1カ月前に第一次世界大戦から帰還してきた元兵士クレブス（Harold Krebs）のある1日の生活。場面は、オクラホマの田舎町。時期については、クレブスが故郷へ帰還して「約一カ月後」（113）の「晩夏」（112）とのみ語られていて、年代については語られていない。しかし年代を推測する材料はある。たとえば「クレブスがオクラホマの故郷へ帰還するまでに、英雄たちの歓迎はすでに終わっていた」（111）と語られている。また、クレブスの故郷への帰還が、町民には「かなり滑稽」（111）に思えるほどに「遅すぎた」（111）し、「あの戦争が終わって数年後（years after the war was over）」（111）だったと書かれている。だから文字通りに解すれば、クレブスの帰郷は、休戦の1918年11月から数年後、つまり1920年以降の夏のことになる。

ところがこの「数年後」については、これを文字通りには受け入れない解釈が、私がたまたま目にしただけでも8つある。その全ては、クレブスが1919年夏に帰郷したとしている。その内の3つ（Roberts 516; Ullrich 364-65; Mellow 122）はそう判断した根拠を示していない。他の1つは作者のケアレスミスで「数カ月後」の誤りだとしている（Jones 17）。残りの4つは、事実は「数カ月後」なのだが、主観的な印象で「数年後」と語っているとしている（Boyd 52; Monteiro 51; Lamb 23; Trout 14）。

休戦から「数カ月後」か「数年後」かはテーマにかかわる問題なので検討しておく。その判断の根拠を示さずに「数カ月後」としているものについては、反論のしようがない。ケアレスミスだとする考えには、この短編のこの個所ではそんなことは「まずありえない」（Monteiro 50）と、私も考える。そこで、残りの4人の主観的な印象を表したものだという見解に反論しておく。

まず、同郷の元兵士たち「全員」（111）が、クレブスよりもずっと早くに帰郷しているからだ。クレブスが属していた第二師団は、1919年夏に米国に帰還している（111）。また、アメリカ外征軍のなかで最も重要な第一師団が米国に帰国してニューヨークとワシントンで約25000人の兵士が盛大な凱旋パレードをしたのが、1919年秋の9月10日と17日である（“September 10, 1919”）。そして徴募兵と志願兵との間に除隊の時期に違いはない（Trout 14）。とすれば、夏に帰郷しているクレブスは、故郷の元兵士「全員」よりも「かなり滑稽」に思えるほど「遅すぎた」のだから、1920年の夏以降に帰郷していなければならない。

次に、本文には「（クレブスは）第二師団が1919年夏にライン川から戻ったときに米国に戻ってきた」（111）と書かれているからだ。この「1919年夏」という表記は、現実の第二師団がニュージャージー州ホーボーケン（Hoboken）に帰還したのが1919年8月3日だった（Trout 14）から歴史的事実とも合致している。ここで注意すべきは、1919年夏に米国に帰ったとのみ書かれていて、故郷に帰ってきたとは書かれていない点だ。たしかに、ヨーロッパ戦線に派遣され

た兵士が米国に帰国すれば、間もなく除隊になることが通例である。しかし除隊になれば、すべての兵士が故郷に戻るわけではない。たとえばフィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) は、1919年2月にアラバマ州の基地で除隊になると、すぐにニューヨークに出てきて作家としての自活の道を探し、同年7月になるまでニューヨークに留まっていた故郷に帰っていない (Brucoli 96)。

以上の2点からだけでも、クレブスは休戦から数年後の夏に帰郷したと考えるのが妥当である。では、それはいつ頃だったのか。草稿では1920年となっていた (Smith 72) ようだが、私は1921年の夏だったと考える。なぜならクレブスの田舎町では、「ふしだらな娘たち」(112) ではない、多くのふつうの若い娘たちが、クレブスが入隊する以前には見かけなかった「髪をショートカットにしていた」(112) と語られているからだ。一方で、流行に敏感なフィッツジェラルドが短編「バーニス断髪す (“Bernice Bobs Her Hair”)」を発表したのがサタデーイブニングポスト (*Saturday Evening Post*) の1920年5月1日号だった (Fitzgerald 25) し、ニューヨークで一般の若い娘が髪をショートカットにするのが流行し始めていると、ニューヨークタイムズ (*NY Times*) が報道したのが1920年6月27日のことだったからだ。つまり、ニューヨークの流行がオクラホマの田舎にまで届くには時間ラグが必要だから、この物語の場面は早くても1921年の夏と考えるのだ。

主人公のクレブスは、実家に戻って「約一カ月」しか経っていない。だとすれば、属していた第二師団が1919年夏に米国に帰還したにもかかわらず、それから約2年間故郷に帰っていないことになる。これは常識的に言っても、異例なことだ。このことも、先の8人の研究者がクレブスの帰郷を1919年とした理由のひとつだろう。

II

過酷な戦場を経験した兵士が除隊になれば、ふつうなら、すぐに帰郷して心身を休めたいとなるのが自然だろう。しかしクレブスは除隊後2年間も故郷に戻らなかった。それはなぜなのか。

クレブスの故郷の町の若者たちは全員が徴兵で入隊している (111)。だが、クレブスは1917年に大学から志願して入隊している (111)。しかもアメリカ外征軍のなかでもっとも死傷者率の高かった第二師団 (Trout 14) の海兵隊に入隊している。海兵隊は、アメリカの4軍のなかでもっとも勇猛だと知られている。さらにオクラホマ州で志願して海兵隊に入れたのは各郡 (county) でわずか「4人か5人」(Trout 18) で、オクラホマ出身の海兵隊員は「ごく希 (ultimate rarity)」(Trout 18) だった。クレブスは、愛国心が旺盛で勇猛果敢を自認している選ばれた新兵だったのだ。

しかし戦場では、クレブスは目覚ましい武勲をあげることはできなかったと思われる。なぜならクレブスは、休戦後でも「伍長 (corporal)」(111) だったからだ。海兵隊で伍長という

のは、下士官ではあるが、最下位の下士官で、三等軍曹（sergeant）よりも下の階級だ。大学を中退して志願すれば、入隊時にはたんなる「兵卒」ではなく下士官で任官した可能性が高い。ちなみにプリンストン大学を中退しているフィッツジェラルドは1917年11月に陸軍の少尉で任官していて、戦場には出ていないのに1918年4月には、伍長より9階級上の中尉に昇任している（Turnbull 89）。つまりクレブスは戦場に出ているのに階級が上がっていないのだ。

とすれば、コブラーも指摘している（Kobler 382）ように、退役時に伍長であるクレブスは戦場で目立った武勲をあげることはできなかったと考えられる。というよりむしろ、クレブスは下士官としてその任務をじゅうぶん果たせていなかったと思われる。そう考える根拠は一枚の写真にある。

クレブスは、ラインの河畔で仲間の伍長と、ドイツ人の売春婦と思われる「美しくない」（111）女性2人と4人で写真を撮っている。この写真は、メソジスト派の大学で同じ襟の服を着た学友たちと一緒に撮った写真（111）とは対照的に、「孤立と分離（isolation and separation）」（DeFalco 140）の雰囲気だけがただよっている。この孤立感のただよった写真に写っているクレブスは、仲間の伍長と2人とも揃って「軍服には大きすぎるように見えた（look too big for their uniforms）」（111）と、軍服が身に合っていないことが語られている。

この窮屈になった軍服については、クレブスの知的・性的な成長（Ruben 56, 64; Baerdemaeker 64）や「ある意味での成長」（Lamb 21）を表しているという解釈がある。しかし、いかなる仕事においても、制服が身に合っているというのは、その仕事において有能である証拠である。さらに、ヘミングウェイの別の短編「誰も知らない（“A Way You'll Never Be”）」（1933年）では、「少しきつい（a little tight）」（CSS 312）軍服を着ている主人公の兵士は、戦闘によって生じた神経症に苦しんでいて、兵士として不適格であると語られている。きつい制服と兵士としての不適格とが対応している。だから写真に写っているクレブスからは、クレブスが軍人として有能ではなかったことが暗示されていると解釈できる。

もちろん入隊時には、身体に合った軍服が支給される。この年齢で身長が伸びることはない。だから2人は入隊してから太ったのだ。2人とも揃って窮屈に見えたという表現からは、クレブスの軍服が窮屈に見えたのは、クレブスに関してのみの偶然ではなく、2人とも太っていて、太っていたのは事実であったことを示唆している。孤立のなかで、類は友を呼んでいるのだ。

河田も言う（河田 23）ように、過酷な戦場で、兵士が太ることは通常考えられない。だから2人とも、前線から離れた後方で、太ったと推測できる。そして兵士が戦場から離れられるのは、心身が負傷したときだろう。ところが、クレブスは、身体的に負傷したとは語られていない。また、帰郷してからの様子からも、心に悩みを抱えているのは感じられるが、身体的な傷を負っているようには感じられない。そのうえ、もし万一身体が負傷していたら、名誉の負傷だから帰国してから2年後にひっそりと帰郷する必要はない。だから戦場で心を病んだと考えられる。そしてその心の傷の治療の過程で太ったのだ。この写真を撮ったときには、クレブ

スは戦争で神経がすでに傷ついていて、その影響が太った身体にでていたのだ。

クレブスが帰国後なぜ2年間も帰郷しなかったのかという疑問の答もここにある。クレブスも、自分が戦争による神経症を明らかにわずらっている姿を、故郷の人びとに知られたくなかったのだ。というのは、戦争神経症にかかる者は、当時、臆病者か意志薄弱者か社会生活不適應者か作病者と見なされがちだった (Herman 21) からだ。現在でも、2016年10月に、大統領候補だったトランプ (Donald Trump) は、「強い (strong)」兵士は、戦争や戦闘で PTSD に苦しむことはないと主張している (*NY Daily News*)。そんな世間の眼は、勇猛果敢を自認して出征した選ばれた兵士にとっては、耐えられないものだった。だから戦争神経症がある程度回復するまで⁽¹⁾、故郷に戻らなかったと考えるのだ。

故郷に戻らなかった2年間の内のいくらかは、可能性としては、医師の治療をうけていたり (O'Neill 656-72)、設立されていた戦争神経症治療のための専門病院で治療をうけていたり (*NY Times*, Aug. 21, 1921)、あるいは南北戦争以降各地にあった戦争で心身が傷ついた兵士を収容する「兵士の家 (Soldiers' Home)」と呼ばれていた施設 (Trout 6-7) に留まっていた可能性がある。いずれにせよ、空白の2年間の後、戦争神経症からかなり回復できたと信じたクレブスは故郷の実家に戻ってきたと考えるのだ。

なぜそう考えるかといえば、実家に戻っているクレブスが戦争神経症の症状と思われる症状を今も示しているからだ。戦争による神経症を考えるうえで、現在もっとも信頼できる基準は、米国精神医学会編「PTSDの診断基準」(American Psychiatric 218-20) だろう。その手引き書の PTSD 診断基準を参考にして、帰郷したクレブスを検討すると、少なくとも8つの点で診断基準の項目と一致している。それは、たとえば、1) 最悪の戦闘を5つも経験している、2) 最初は戦争の話をしようとしなかった、3) 戦時中に起こった全てのことにたいして嫌悪感をもっている、4) 社会の関係性のなかで生きることを拒否している、5) 遅くまで寝ている、6) 感情が制限されている、7) 未来を思い描けない、8) 怒りっぽくなっているを挙げることができる。

しかしたしかに、クレブスは戦争体験を誇りにして、戦争体験によって男性性を獲得して大人の男として成長した (DeFalco 144; Cohen 163; 板橋 84-85) という意見もある。しかしもし仮にクレブスが大人の男として成長したとするなら、帰還してからの故郷での先に指摘したふるまいは理解できないものになる。もちろんこれまでも、クレブスが戦争で精神的に傷ついていることを指摘した研究はある (Imamura 102-03; Hoffman 98; Ullrich 366; Sheridan Baker 27; Stewart 212; Eby 147-8)。しかしそれらの研究はそのことをじゅうぶんに検討・展開していない。

III

クレプスは除隊から2年後に実家に帰ってきて、「事態が再びだんだんと良くなってきている（things were getting good again）」(113) と、自分が回復途上にあると感じてはいるが、しかし先に例示したように、戦争神経症の症状を今も示している。クレプスが戦場で心に傷を受けたのは確かだ。

たとえば、戦場を経験した後でのクレプスの変化のなかで、クレプスが示す大きな変化は、クレプスが神を信じられなくなっていることにある。この「兵士の家」の本文の前には、「第7章」という章名の下にイタリック体で書かれた11行の小文（vignette）が置かれている。その小文では、第一次世界大戦のイタリア戦線での兵士の姿が描かれている。その兵士は、砲撃で命の危機に瀕したとき、もし生きながらえられれば神の教えを伝える人となるという交換条件まで出して、心底から神の加護を祈っている。このときの兵士は、人の願いを聞き入れてくれる神の存在を少なくとも信じようとしていたし、神が人知を超えた存在だということを信じていた。しかしその危機的な状況を経験し生きのびると、神との約束である交換条件を完璧に無視している。神の教えを人びとに伝えるどころか、売春宿に登楼して売春婦を買うという瀆^{とく}神^{しん}的な行動をしている。砲撃で命の危機に瀕する経験をしたことで、彼の内部に変化が起きたのだ。『日はまた昇る（*The Sun Also Rises*）』のジェイク（Jake Barnes）が戦争を体験してから「信仰心を抱くことができればよいのに（I only wished I felt religious）」（SR 103）と願っているように、信仰心を失ってしまったのだ。

兵士が戦場で信仰を失う過程をドラマティックに描いているこの小文が、短編「兵士の家」の前に置かれている。だから、メソジスト系の大学にあえて進学した信仰ぶかいクレプスが、信仰を失って故郷に戻ってきた状況を読者は間接的に理解できる。実際クレプスは、戦場では「いつでも吐き気がするほどひどく怖がっていた（had been badly, sickeningly frightened all the time）」(112) と、同郷の帰還兵に語っている⁽²⁾。クレプスも、小文のなかの兵士と同じように、戦闘ではひどい恐怖を感じていたのだ。だからクレプスも、今村も指摘している（Imamura 105）ように、戦場で命の危機に瀕するような状況をくぐり抜けて、生き残ったけれども、入隊前にもっていた信仰心を失ったのだらうと推測できる。

たとえばクレプスは、仲間の伍長と2人で、白昼堂々と売春婦2人と一緒に写真に収まっている。十戒のひとつの姦淫の罪を犯した証拠であるこの写真は、コブラーも指摘している（Kobler 380）が、クレプスの信仰ぶかい家族には見せられない類の写真だった。しかしクレプスは、そんな記念写真を撮ることに抵抗がなくなっていたのだ。これはクレプスが信仰ぶかい家族のもとで養っていたかつての信仰心を失っていたから可能だったと思われる。

IV

この作品のかなりの部分で、クレプスの実家での居心地の悪さが、信仰ぶかい母親との関係を中心にして描かれている。それで、これまでの研究において、母と子との葛藤関係が注目されてきた。この作品は、息子の母親(家族)からの自立をテーマとしているという解釈(Lynn 259-60)すらある。そこまで極端でなくても、母親に反発していたヘミングウェイの自伝的な関心をも反映して、クレプスの母親にたいして厳しい見方のものが多い。たとえば、この母親は「母親として不適格」(Lamb 25)という意見や「自己中心的で残酷で […] ものすごく破壊的」(Griffin 81)とか「モンスター」(Lynn 260)とか「むさぼり食らう母」(DeFalco 143)というようなものまである。

しかし詳細に読んでみると、必ずしも彼女は息子にたいして異常なまでに厳しい身勝手な母親ではないことが分かる。除隊から2年後に初めて実家に戻ってきて1カ月にもなるのに、クレプスは遅くまで寝ていて、読書や玉突きやクラリネットの練習はするが、生産的なことは何もせず玄関のポーチの階段から通りを眺めて、日々を過ごしている。こんな息子の姿を身近に見ていたら、どんな母親でも、「何かすることを決めたの？」(115)とか「そのことをもうそろそろ考えたらどう？」(115)と問いかけると思われる。しかしその当たり前の問に、クレプスは「そんなことは考えたことない」(115)と、すげなく全否定する。すると母親も、彼女の生活を律している神を持ちだしてきて「神様はどんな人にもやるべき仕事をお与えになっている。神の御国には怠け者はありえないの」(115)と、クレプスを真っ向から教え諭^{きと}そうとする。もし仮にクレプスが、「その内に…」などと、もっと曖昧に否定していたら、信仰ぶかい母親でもここまでまともに「神の御国」や「怠け者」の言葉はださなかったと思われる。母親のこの厳しく断定的な言葉は、相手のことを考えないクレプスのすげない全否定が導きだしたのだ。

そして、母に厳しく断定的な言葉で神を持ちだされて、クレプスも、「ぼくは神の御国にはいない」(115)と、あまりにも直截^{ちよくせつ}に本心を言うてしまう。戻ってきた実家では、これまで通り、神という絶対的な存在のもとに日々の生活が今も営まれていた。正常な思いやりと神経があれば、そんな言葉を母親に言うべきではなかった。そんなことを言えば、母親が「わたしたちはみんな神の御国いるの」(115)と真っ向から反論するのは明らかだった。そして母親が感情的になるのも分かっていた。母親への配慮が足らなかったのだ。結果的にここで顕在化した親子の鋭い対立の責任の大半は、クレプスの配慮の無さにある。クレプスのこうした配慮に欠けた態度と、クレプスが神を信じられなくなったこととは表裏一体の関係にある。クレプスの母親にたいする配慮の欠如も戦争にゆく前には無かったと思われる。クレプスは戦争を経験して人柄が変わったのだ。

自分がまいた種から生まれた母親との鋭い対立に、クレプスまでも当惑し腹を立てている。しかし、さすがのクレプスにも、母親にさらに言い返すことが事態をさらに悪化させることが

分かっていた。彼は不機嫌に怒りのなかで沈黙をするより仕方がなかった。

クレプスのその怒りを秘めた沈黙を見とって、母親が「ハロルド、あなたのことをとても心配しているのよ。[...] あなたのために、これまでも神様に祈ってきたし、今も一日中祈っているのよ」（115）と言うのも、信仰ぶかい母親だから、それほど意外な反応ではない。どちらかと言えば、子を思う母の気持ちの必死さが伝わってくる。しかしこのとき、クレプスは黙って、冷えて固くなってゆくベーコンの脂肪を見ている（115）。この固まってゆく白い脂肪は、客観的相関物で、このときのクレプスのしらけた嫌な気分とかたくなに拒絶する気分とを暗示している。彼は母の言葉や母の愛をかたくなに拒絶している。

クレプスのその不機嫌な沈黙や不満げな視線を感じとって、母親が「そんな風に見つめないで。[...] わたしたちはあなたのことを愛していて、あなたのためを思って事情を話しているのは分ってるでしょう」（115）などと、クレプスのことをいかに愛し心配しているかを、くどくどとたたみ掛けてくるのも自然なことだ。

しかしその感情的な口説きに、クレプスは「それで全部？」（115）と応えている。あまりにも冷たい反応だ。感情の交流を拒否した態度だ。この冷たい反応に接して、母は茫然として、「そうよ。ねえ、あなたは母さんを愛してないの？」（116）と、すぎる思いで問いかける。すると「ああ（No）」（116）と最小限の言葉できっぱりと否定する。あまりにも配慮を欠いたふるまいだ。そっけなく「ああ（愛してない）」と息子に面とむかって言われて、冷静でいられる母親はこの世にはいない。母親が「声をあげて泣きはじめる」（116）のも当然だ。こういう愁嘆場しゅうたんが生じるのは、クレプスに母親の気持ちそんたくを忖度する気持ちの余裕がないからだ。

ここまでのクレプスの一連のふるまいには、感情が制限されて円滑な人間関係が築けないという戦争神経症の影響がでていると考えられる。

母親が声をあげて泣くという事態に直面して、さすがのクレプスも母親を慰めようとする。あれほどぶっきらぼうな返事をしていたクレプスが、母親の肩に手を置いて「母さん、ほんとお願いだから、ぼくのことを信じて」（116）と言って、母親の髪の毛にキスマスする。すると、母親は「わたしはあなたの母さんよ。小さな赤ん坊だったときには、この胸に抱いていたのよ」（116）と、息子が自分と一心同体だった幸せな時代のことを話す。しかし過去をとり戻すことはできない。しかも母親との一心同体を望まれることは、成長した息子には嫌悪感が生じるものだ。だからクレプスが、この母のことばを聞いて、「気分が悪くなっ（た）」（116）のは仕方がないかもしれないが、「ちょっと吐き気がした」（116）のは少々過敏で過剰な反応だ。この過敏で過剰な生理的な反応も、戦場での経験を嘘や誇張をまじえて語ったときに「吐き気」（112）を感じたのと同じように、戦争神経症の影響と見なせるだろう。

吐き気を抑えながらもクレプスは「マミー、分かってるよ。母ちゃんのためによい子でいようと思う」（116）と、「マミー」という幼児語まで使って答えて、母に甘えてみせて、懸命に「よい子」であるための演技をしようとする。そして母親が食卓の側で、跪いて神に祈ること

を求めたときには、クレブスも母と一緒に跪き、母の祈りを母の隣で聞いている。その後、2人は立ちあがり、クレブスは母にキスをして外出する。

食堂での母親とクレブスとのこの「もっとも痛々しい」(Baerdemaeker 67)場面は、一見すれば、母親の過干渉から生じたように見えるかもしれない。しかし実態は、息子クレブスの母親にたいする一連の配慮の無さや愛の無さがちよくせつの原因となって生じたものだ。そしてその配慮の無さや愛情の無さは、クレブスが過酷な戦争を体験することで、神が信じられなくなったことと「誰も愛せなくなった」(116)こととによって、つまり戦争で心が傷ついたことで生じたものだ。

クレブスは、戦争による神経症のために、神の御国に生きている情のふかい母との対立が決定的になったのだ。さらにこの対立は、戦争神経症によって円滑な対人関係を築く能力が脆弱ぜいじやくになっていたので、より激しいものになった。だからこの場面に、従来のように、子と母との葛藤というヘミングウェイの自伝的な要素のみを読みとるだけでは、この作品の解釈としては不十分だ。戦争が帰還兵士にもたらした悲劇・苦難を読みとらねばならない。

戦場で心が傷つき信仰心をも失っていたクレブスは、除隊から約2年後に実家にやっと戻ってきた。しかし、神の御国を信じている母親を中心に動いている家族のなかでは居づらくなる。そこでとりあえず、就きたい仕事があるわけではないが、学生時代に知っていたカンサス(Kansas)市に出てゆき、人間関係が希薄な都会のなかで生活しようとする。このときのクレブスは、ウルリッヒが言うように「(かつての)開拓者が抱いていたような希望」(Ullrich 372)を抱いて、カンサス市に向かったわけではない。その辺りの事情は、『グレート・ギャツビー(The Great Gatsby)』(1925年)の語り手ニック(Nick)よりも(野間 124-26)、もっと漠然とした故郷からの脱出だった。

この短編は、おもに帰還兵士クレブスの実家(home)での一日の生活を描いている。だから、そのタイトルが「兵士の家("Soldier's Home")」であるのも納得がゆく。しかしほんらい愛とくつろぎを与える拠り所であるべき「家」が、この作品では、クレブスにストレスを与え、クレブスを「家」から追放している。結果的に、皮肉なタイトルとなっている。

また一方で、このタイトルは同じ発音の「兵士の家(Soldiers' Home)」をも想起させる。「兵士の家」は戦争で心身が傷ついた元兵士たちがその傷を癒すための施設だ。だから、戦場で受けた傷を実家で癒すことができないクレブスを描いているこの作品では、そのタイトルに作者の皮肉な視線を感じざるをえない。

こうしたことを考慮すれば、この作品のタイトル“Soldier's Home”は、これまで「兵士の故郷」と広く訳されてきたが、そのような漠然とした一般的な訳ではなく、作品内容をもっと適切かつ具体的にあらわす「兵士の家」の方が、タイトルとしてはふさわしいように思われる。

最後にまとめると次のようになる。クレブスは、愛国心あふれる勇猛果敢であることを自他とも認める兵士として海兵隊に勇躍志願して、ドイツ戦線に派遣された。ところが戦場で精神

的な傷を負った。その結果、他の同郷の若者たちは戦後すぐに帰郷したので英雄として大歓迎されたが、クレブスは終戦から数年後に、誰にも英雄として歓迎されることもなく、ひっそりと実家に戻ってきた。戦場から生きて故国に帰って来ても、クレブスは戦場で精神的に傷ついているから、また勇猛果敢な兵士として出征した手前、すぐには実家に帰れない状況が生まれていたのだ。さらに数年ぶりに実家に帰って来ても、精神的な傷はいまだに完全には治癒していないから、自分の未来を思い描けないだけでなく、他人を愛することもできず、家族を思いやる精神的余裕にも欠けていた。だから、やっとたどり着いた家族の元からも出てゆかねばならない。戦争で心が傷ついた兵士のこのような苦難を、短編「兵士の家」は、クレブスの実家での一日を描くことで、読者に語りかけている。

〔注〕

- (1) サリンジャー（J. D. Salinger）は戦争神経症の影響が見いだされる帰還兵士シーモア（Seymour）について、「陸軍がシーモアを病院から退院させたのは完璧な犯罪（perfect crime）だと医者が出ている」（*Nine* 6）と作中人物に語らせている。米軍は戦争神経症に苦しむ兵士をかなり早い段階で退院させていたのだ。シーモアは第二次世界大戦からの帰還兵士だが、事情は第一次世界大戦でも大差なかったと思われる。
- (2) この個所は、「（クレブスは）他の兵士たちの間では、ベテラン兵士のくつろいだポーズ」（112）をとっていたという部分に、コロンでつながれて続いている。だから、「ポーズ（ふり）」との関連を強調して、この部分は彼の嘘の証言（ポーズ）だとする解釈がある（McKenna 204-05; Cohen 162; Mellow 125; 板橋89）。しかしここでの「ポーズ」はベテラン兵士に掛かっている、ベテラン兵士のような余裕ある態度を示していたことを指している。一方で、兵士が戦場で恐怖を感じるのは自然なことだが、兵士たちは故郷に凱旋したとき、「英雄」として「熱狂的に」迎えられた。だから故郷の人びとの前では、帰還兵士たちは、戦場で恐怖など感じなかった英雄としてふるまわなければならなかった。それを知っていたクレブスは、帰還兵士しか居ない場所では、世間から求められている「英雄のフリ」をする必要がないと考え、戦場を熟知しているベテラン兵士という態度（ポーズ）をとることで、戦場で恐怖を感じていたという事実を語ったと解するべきだ。さらに言えば、ヘミングウェイが戦争を描いているおもな短編は3つ（“In Another Country” “Now I Lay Me” “A Way You’ll Never Be”）あるが、その3編すべてのなかで兵士が戦場で直面する恐怖が語られている。だからクレブスも、この3人の兵士と同じように、また、この「兵士の家」の前に置かれた小文の主人公と同じように、戦闘ではひどい恐怖を感じていたと考えるのが妥当だろう。

Synopsis

Hemingway’s “Soldier’s Home” mainly describes one day in the life of Harold Krebs, who had come back to his home a month earlier in the summer “years after the war was over.” When he came back home, most of the young girls in his home town had their hair cut short. Hence, even though eight critics insist “years” in fact means “months,” Krebs probably came home in the summer of 1921 because *The NY Times* included an article “Vogue of Bobbed Hair” on June 27, 1920. And as he returned to the United States with the Second Division in the summer of 1919, he presumably did not come home for about two years even after returning to his native country.

There is no clear explanation for why he did not come home for about two years, but we can surmise that he was suffering from war neurosis during that time for the following four reasons. Firstly, symptoms of war neurosis appeared in his behavior at home, which is epitomized in his

losing his faith in God; secondly, he still remained a corporal when he was discharged from the Marines; thirdly, the picture taken on the Rhine showed that he and another corporal looked too big for their uniforms, which reveals that they grew fat in the course of medical care behind the front; and finally there is no mention of him being physically injured. At that time a soldier suffering from war neurosis was likely to be considered as an inferior human being or a malinger or a coward. Therefore, he, taking pride in leaving college to enlist in the valiant Marines, tried to avoid betraying noticeable symptoms of his war neurosis to the people of his town, and he waited for two more years until he had fairly recovered.

Although he recovered considerably from the neurosis, he still had neither his faith in God nor had any sense of a happy future, and he “[didn’t] love anybody.” The aftereffects drove him into troubles at home, because his family was dominated by the pious and affectionate mother who didn’t try to fathom her son’s anguish. She single-mindedly wished her son to settle down, and she could not tolerate her son who professed his impiety and his lack of affection for her. Inevitably this caused painful disputes between mother and son; hence some critics, taking account of Hemingway’s own troubles between him and his mother, believe that the story mainly relates the mother and son disputes. However, Krebs’ troubles originate in the aftereffects of his neurosis, which restricted his ability to love and made him lose his faith and his prospects for the future. Namely, the story narrates the sufferings of a returned soldier who did not come home for two years even after returning to his homeland and who did not behave properly at home and finally could do nothing but leave home.

〔引用文献〕

- American Psychiatric Association. *Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. 2000. American Psychiatric Association, 2004.
- Baker, Sheridan. *Ernest Hemingway: An Introduction and Interpretation*. Holt, 1967.
- Baerdemaeker, Ruben De. “Performative Patterns in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’.” *The Hemingway Review*, vol.27, no.1, Fall 2007, pp. 55-73.
- Boyd, John D. “Hemingway’s Soldier’s Home.” *The Explicator*, vol.40, no.1, 1981, pp. 51-53.
- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. 1981. U of South Carolina P, 2002.
- Cohen, Milton A. “Vagueness and Ambiguity in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’: Two Puzzling Passages.” *The Hemingway Review*, vol.30, no.1, Fall 2010, pp. 158-64.
- DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway’s Short Stories*. U of Pittsburgh P, 1963.
- Eby, Carl. *Hemingway’s Fetishism: Psychoanalysis and the Mirror of Manhood*. State U of New York P, 1999.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew Bruccoli, Scribner, 1989.
- Griffin, Peter. *Less Than a Treason: Hemingway in Paris*. Oxford UP, 1990.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. The FincaVigia Edition. 1987. Scribner, 2003.
- . *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*. 1981. Edited by Carlos Baker, Scribner, 2003.
- . *The Sun Also Rises*. 1926. Scribner, 2006.
- . “Soldier’s Home.” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. The FincaVigia Edition. 1987. Scribner, 2003. pp. 110-16.
- Herman, Judith. *Trauma and Recovery*. 1992. Basic Books, 1997.
- Hoffman, Frederick. *The Twenties: American Writing in the Postwar Decade*. 1955. Free Press,

- 1965.
- Kobler, J.F. “‘Soldier’s Home’ Revisited: A Hemingway *Mea Culpa*.” *Studies in Short Fiction*, vol.20, 1983, pp. 377-85.
- Imamura, Tateo. “‘Soldier’s Home’: Another Story of a Broken Heart.” *The Hemingway Review*, vol. 16 no. 1, Fall 1996, pp. 102-07.
- Jones, Horace P. “Hemingway’s Soldier’s Home.” *The Explicator*, vol.37, no.4, 1979, p. 17.
- Lamb, Robert Paul. “The Love Song of Harold Krebs: Form, Argument, and Meaning in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’.” *The Hemingway Review*, vol.14, no.2, Spring 1995, pp. 18-36.
- Lynn, Kenneth S. “Hemingway’s Private War.” *Commentary*, July 1981, pp. 24-33.
- McKenna, John J. and David M. Raabe. “Using Temperament Theory to Understand Conflict in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’.” *Studies in Short Fiction*, vol.34, 1997, pp. 203-13.
- Mellow, James R. *Hemingway: A Life without Consequences*. 1992. Perseus Books, 1993.
- Monteiro, George. “Hemingway’s Soldier’s Home.” *Explicator*, vol.40, no.1, 1981, pp. 50-51.
- New York Daily News*. “Trump Suggests Vets with PTSD Aren’t ‘Strong’.” October 3, 2016. <http://www.nydailynews.com/news/politics/trump-suggests-vets-ptsd-aren-strong-article-1.2815752>. Accessed 4 May 2016.
- The New York Times*. “Vogue of Bobbed Hair.” June 27, 1920.
- . “‘War’ Nerve Cases Difficult to Treat.” August 21, 1921.
- O’Neil, Eugene. “Shell Shock.” *Eugene O’Neil: Complete Plays 1913-1920*. Library of America, 1988, pp. 656-72.
- Roberts, John J. “In Defense of Krebs.” *Studies in Short Fiction*, vol.13, Fall 1976, pp. 515-18.
- “September 10, 1919: New York City Parade Honors World War I Veterans.” *WWW. History Com*. <https://www.history.com/this-day-in-history/new-york-city-parade-honors-world-war-i-veterans>. Accessed 4 May 2016.
- Salinger, J.D. *Nine Stories*. 1953. Little, Brown, 1953.
- Smith, Paul. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. G.K. Hall, 1989.
- Stewart, Matthew C. “Ernest Hemingway and World War I: Combatting Recent Psychobiographical Reassessments, Restoring the War.” *Papers on Language and Literature*, Spring 2000, pp. 198-217.
- Trout, Steven. “‘Where Do We Go from Here?’: Ernest Hemingway’s ‘Soldier’s Home’ and American Veterans of World War I.” *The Hemingway Review*, vol.20. no.1, Fall 2000, pp. 5-21.
- Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. 1962. Vintage, 2004.
- Ullrich, David W. “‘What’s in a Name?’ — Krebs, Crabs, Kraut: the Multivalence of ‘Krebs’ in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’.” *Studies in Short Fiction*, vol.29, no.3, 1992, pp. 369-75.
- 板橋好枝 『『兵士の故郷』——無力化された言語』 『ヘミングウェイの時代 短編小説を読む』 彩流社1999年 77-106頁。
- 河田英介 「胡乱なクレプスの母への執心、二重化される帰還不可能性——アーネスト・ヘミングウェイ “Soldier’s Home” 論」 *Strata* 25. 2011年 23-43頁。
- 野間正二 『「グレート・ギャツビー」の読み方』 創元社2008年。

【付記】 本論文は第56回日本アメリカ文学学会全国大会（鹿児島大学・2017年10月14日）で口頭発表をしたものを修正したものです。

（のま しょうじ 英米学科）

2018年10月25日受理